

る。也。按ずるに、延寶の金澤圖に、篠原織部、前口廿六間・奥行西側三十二間四尺・東側三十三間三尺とあり。篠原氏移轉の後、稻垣氏へ賜はりたりと聞ゆ。従前は居邸の東角に庫藏あり。城内とひとしき腰瓦になしたり。此の瓦は國禁なりといひ傳へ、此の庫藏より外に諸士の邸宅になし。故に稻垣の土藏とて珍重せしかど、廢藩置縣の際家屋と共に取毀ち、今は石垣のみ残り、邸地は悉く茶畠となしたり。

○稻垣意閑傳

燕臺風雅に云ふ。稻垣安根通名三郎兵衛、號需齋、號蒙齋。懸車後號意閑と。鳩巢文集に載せたる蒙齋記に曰く。白山天下之名山也。去賀城百二十里。塞上游鎮。衆山巍然居州之東南。其西則山勢相因。爭馳來赴于府。皆當府之南。而犀川之水出於其間。遙々而流。循城而西。百里達于海。吾友稻垣君宅於其側。凡幾年。是歲之秋。始得遊其所謂需亭者。於是仰而望山。則高者崔嵬而特出。下者巉巖而相累。延而相攀如長城。逼而相對如雙闕。呀然而懸者如虎豹之咆。紆然而轉者如龍蛇之屈。仰者如舟。覆者如屋。竄者如鼎。

其俯而臨水。則遠者近者。昂者低者。險者豁者。流而爲淵。岐而爲沱。環而爲坻。停而爲澗。遶林折旋。循岸明滅。透迤而逝。翕忽而去。溶々焉。飄々焉。凡山水之千形萬狀。一寓目而無遺矣。不料城府之近而有此也。君既爲亭。俯仰其間。以樂之。其東北有讀書之室。與亭相接。請余名之。使知所。以自勗者。余以爲天下之至靜者山也。而仁者樂之。天下之至動者水也。而智者樂之。今夫山一塊土爾。然能含精藏澤。出內雲雨於其中。所以養水之源也。而其氣扶輿磅礴。鬱蒸上下。久之不已。則泉噴沸而始出。洋溢乎澗壑之間。及其注乎千仞之巖。過乎萬國之地。冒險衝阻。而不以爲難。超都隴境。而不以爲遠。沛然其不可禦。遶乎其莫之追。若是乎。有源之有利於用也。其積也厚。故其出也果。其遠也漸。故其施也溥。易曰。山下出泉。蒙君子。以果行育德。請命之曰蒙齋。可乎。夫以君之材加之以學。其進於道也。孰能禦之。使其靜而有養。動而無差。蘊蓄於中如山。施行於外如泉。盈科而進。成章而達。左右逢其源。雖仁智之樂亦庶幾乎。見其大而忘其小。玩其理而失其形。安知。他日所以觀於山水者。無異於今也耶。君曰。

然吾尙勉之。於是乎記。

元祿十二年八月十九日

敬所 室 直 清

稻垣氏其祖與三右衛門、天正十二年利長卿に奉仕し、糧米九百俵を賜はり、青山佐渡守と共に越中魚津城に置かる。

二代三丞某三百石を賜はる。二子あり。長男安成父が遺跡を繼ぐ、次男安根寛永二十年に新知二百石を賜はり、一家を建て、殊に屢、加恩ありて千石を賜はり、馬廻組頭・定番頭を勤め、正徳二年八十歳に及び致仕し、老名を意閑と稱し、享保三年四月九日歿す。于時八十六歳なり。按ずるに、寛永廿年より正徳二年に至り、凡そ七十年藩侯三世に歴仕し、實に藩士中の古老たる一人といふべし。

○青地采女邸跡

稻垣氏邸跡の隣地なり。延寶の金澤圖に、青地采女と記載し、元祿六年の士帳に、青地彌四郎長町竹田五郎右衛門向とあり。彌四郎は即ち采女定政の嗣子なり。爾後歴世爰に居住し、廢藩の際家屋地所を賣却して退去せり。

○青地采女定政傳

青地氏は本國近江、佐々木氏の族にて、其の祖駿河守茂綱

は實は蒲生定秀の二男なり。茂綱の男青地四郎左衛門光綱、慶長四年初めて利長卿に奉仕す。二代四郎左衛門等定は、實は佐々木中務大輔承漢の四男にて、利常卿に奉仕す。是采女定政の養父なり。定政は實は本多安房守政重の男本多志摩の孫石川久六郎の男なりと、青地譜にあり。三壺記に云ふ。本多安房守政重物領に、童子名大六郎後志摩守と申しけるは、病者なるゆゑに京都へ養生に上り、終に空敷成りけり。志摩守京都にて召仕の者に一子をまうけゝるを、天下無双の富家石川宗林といふ大身なるもの、其の子を申請けて養育し、跡職を相渡す。然る處若盛りに病者に成りて終に畢りぬ。此の子を金澤へ呼び下し、青地四郎左衛門の嗣子となし、青地采女と申しけり。と見ね、本多譜に、元祖安房守政重。慶長九年上杉景勝實子無之。依之家老直江山城守兼續之爲婿養子。兼續之娘早世。依而兼續之實弟大國但馬守娘を養女と成し娶之。男子出生、幼名大六郎と稱す。然る處景勝實子出生に付、政重米澤を退去し、妻子を引連れ京都に住す。大六郎成長の後、志摩守政近と稱し、京都に於て歿す。青地采女は、政近の孫也。とあり。